

JICA 教師海外研修 授業実践報告書

【実践者】

氏名	松本あゆみ	学校名	埼玉県立上尾特別支援学校
担当教科等	生活単元	対象学年（人数）	『1～4 時』 4・5・6 年 (4 4 人) 『本時』 5 年 1・2・重複 (1 4 名)
実践年月日もしくは期間（時数）	2025 年 12 月 1・3・5 日（6 時間）		

【実践概要】

1. 実践する教科・領域：生活単元学習		
2. 単元名と単元目標 単元名： 上尾発・世界行きータンザニアのごはんをのぞいてみようー 単元目標： 世界を身近に感じ、異文化や食文化について興味を持つことができる。 関連する学習指導要領上の目標：小学部生活科の目標「具体的な活動や体験を通じて、生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育てる」に基づき、本単元では「海外旅行に行こう」を導入として扱い、外国への行き方を学習した後、タンザニアへの模擬旅行を行う。さらに、食文化をテーマに調理実習を通じて、五感で異文化を体験し、身近に感じられるようにすること を 目標にしている。		
3. 単元の評価 規 準	①知識・技能	外国についてイメージをもつことができる。
	②思考・判断・表現	日本とタンザニアの食べものの違いや似ているところに 気づき 、感じることができる。
	③主体的に学習に取り組む態度	教員や友達と一緒に楽しく取り組むことができる。
4. 単元設定の理由・単元の意義 (児童/生徒観、教材観、指導観)	【単元設定の理由】 本学級では、知的障害と自閉症を合わせ有する児童が在籍し、言語的な理解よりも、視覚的支援や実際の体験を通じた学びが効果的である。加えて、今年度の文化祭では「万博」をテーマに、海外の国旗や挨拶を歌やダンスを通じて学ぶ活動に取り組んだ。その際、異文化に対して興味や親しみを示す児童の姿が多く見られた。この経験を踏まえ、児童の関心をさらに広げ“世界にはさまざまな文化がある”ことを五感で感じて ほしい と思い、本単元を設定した。 【単元の意義】 本単元は、日常生活の中で身近な「食」を題材にしながら、異なる国や文化に触れる体験を通じて、児童が様々な世界へ興味関心を広げることをねらいとしている。加えて、知的障害を有する児童にとって、異文化や海外といった抽象的な概念は理解しにくい、「見る」「聞く」「触る」「嗅ぐ」「味わう」など五感を使	

	った体験的な活動を通じて、異なる文化を具体的に感じることができる。本単元では、タンザニアの食文化を題材とし、映像や写真、実際の食材に触れる活動を中心に展開することで、児童が楽しみながら学び、世界の人々との共通点や違いを感じ取る機会を目的としている。 【児童／生徒観】 本学級の児童は、知的障害と自閉症を合わせ有する児童が在籍している。そのため、抽象的な概念の理解には困難さがみられる一方で、具体的な活動や体験を通じて学習に取り組んでいる。見たり、聞いたり、触れたりといった五感を働かせる活動に強い関心を示し、体験を通じて得たことを徐々に言葉や表情、しぐさなどで表現する姿が見られる。また、身近な人との関わりの中で安心感を得ることで、意欲的に学習に取り組むことができる。さらに、「できた」「わかった」といった達成感や、教師からの肯定的な声かけが学習意欲を高める要因となっている。加えて、外国の国旗やあいさつ、音楽、ダンスなどの活動にも関心を示す児童が多く、世界や異文化に親しみをもつ感性が芽生えつつある。本単元では、こうした児童の興味を生かし、五感を通じた体験的な学びを重ねることで、異文化への理解を深められるよう展開していく。 【指導観】 児童一人一人がもつ特性や感じ方を尊重し、「わかる」「できる」「楽しい」という実感を積み重ねることを大切にしている。知的障害や自閉症を有する児童にとって、学びは体験の中にあり、成功体験や肯定的な関わり合いができるよう指導している。また、五感を通じた体験的な活動では、児童の表情や反応を読み取りながら、一人一人の特性や理解度に応じた支援や工夫をしていく。
--	--

5. 単元計画（全 6 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	「海外旅行へ行こう！」	①海外旅行の行き方について知り、パスポートや飛行機の利用方法を理解する。 ②映像や絵資料を通して、海外旅行を身近に感じ、世界への関心を高める。	パワーポイントを使用し、飛行機が離陸・着陸する様子を見せたり、チケットやパスポートを模した冊子を受け取ったりする活動を行う。自分が実際に旅行をしているような体験を通じて、「海外に行ってみたい」という気持ちを高め、学習への興味を持つ。	・現地写真 ・模擬のパスポートと航空チケット ・パワーポイント
2	「タンザニアってど	①タンザニアへの関心を高め、国の位置	現地の撮影した写真や映像を見ながら、タンザニアの自然や人々の	・現地写真 ・パワーポイント

	こたろう？」	や特徴についてイメージをもつことができる。	暮らしの様子を知る。映像や教師の説明を通して、児童が「遠い国にも自分たちと同じように生活している人がある」と感じ、タンザニアに親しみや興味をもてるようにする。	
3	「タンザニアのごはんをのぞいてみよう」	①タンザニアの食文化にふれ、異国の食べ物や食習慣に興味・関心を広げる。	現地で撮影した魚市場の写真や実際に使われている食材を提示する。クイズ形式で写真や映像を見ながら、タンザニアの食文化の特徴を知り、異国の食べ物に対して親しみや関心を持てるようにする。	・現地写真 ・パワーポイント
4	「タンザニアのきゅうしゅくをのぞいてみよう」	①児童に親しみのある給食を題材にして、タンザニアと日本の食文化の違いに気づき、異なる文化を感じ取ることができる。	日本の学校給食の写真と、タンザニアの学校で提供されている給食（おやつ）の写真を見比べる。食べ物の種類や食器、食べる環境などの違いを通じて、タンザニアの食文化に関心をもち、「ちがい」や「共通点」を感じ取ることができるようにする。	・現地写真 ・現地で実施した食文化アンケート ・パワーポイント
5・6 本時	「ウガリをつくってみよう」	タンザニアの国民食であるウガリを実際に作り、五感を働かせて異文化の食を楽しむ。	ケニア出身のゲストを招き、ウガリがどのような場面で食べられているのか、またその作り方について教えてもらう。児童は講師の話や実演を見たり、実際に材料を混ぜたり、においや手ざわりを感じながら、五感を通して異文化の食を体験する。活動を通して、異なる国の食文化へ興味や親しみを持つことができるようにする。	・食材（現地で調達したウガリの材料：とうもろこし粉） ・調理器具 ・写真 ・ケニア出身のゲスト
6. 本時の展開（5・6 時間目） 本時のねらい：タンザニアの国民食であるウガリを実際に作り、五感を働かせて異文化の食に親しみをもつ。				
過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態		指導上の留意点（支援）	
導入 （10分）	・ケニア出身のゲストを紹介する。 ・挨拶の言葉「ジャンボ」をみんなでする。 問「タンザニアやケニアの人たちは、どんなごはんを食べているのかな？」と問いをかける。ウガリの写真や動画を		・イラストを用いて、ケニアについてイメージできるように提示する。 ・ウガリの実物を見せ、触っ	

内容が家庭へも広がっていることがうかがえた。

【本時または単元について、個人で振り返ったことを記載】

11. 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか	海外研修では、現地の言語、食文化、価値観、歴史、文化など、さまざまな視点からタンザニアについて学ぶ機会を得た。中でも、食文化や性に対する考え方が日本とは大きく異なる点に強い印象を受けた。ザンジバル島において、JICA 海外協力隊として活動されている方から、「現地の人々は長生きを必ずしも美德として捉えていない」という話を伺い、長生きを重視する日本の価値観との違いを実感した。また、このような価値観が食文化とも影響していることを学んだ。これらの学びを踏まえ、児童に異文化を身近に感じさせる題材として、タンザニアの食文化を授業で取り上げることにした。食は児童の生活経験と結びつきやすく、異文化を具体的に捉えさせる手立てとして有効であると思った。
12. 苦勞した点	知的障害や自閉症のある児童に対して、どのように国際理解教育を進めていくかが課題であった。特に、障害の程度や認知特性が児童によって多様である中で、すべての児童が安心して参加し、楽しむことのできる授業をどのように構成するかについて苦勞した。
13. 改善点	今回は 1 時限目から 4 時限目までは小学部高学年を対象に全体で授業を行い、本時の調理実習については、場所や人数の制約により、学級単位での実施となった。こうした実施形態を踏まえると、今後は障害特性や理解度に応じてグループを編成し、授業内容を構成することで、より一人一人の児童にとって学びの深まる時間になったのではないかと考えられる。
14. 成果が出た点	授業の導入では、「海外旅行に行こう」をテーマとして授業展開をした。世界への関心を高める手立てとして、児童一人一人が自分のパスポートや航空チケットを手にとることで、児童の興味関心を引き出すことができた。食文化に関する学習では、クイズ形式の活動を取り入れ、日本の食文化と比較したり、日常的に食べられている学校給食と現地の食文化を比較したりすることで、異文化をより身近に捉えられるよう工夫した。また、本校では文化祭の発表において「万博」をテーマにした取組を行っており、今回の授業に加えて、世界のあいさつの歌やダンス、国旗を描く活動などを通じて、横断的な学びへと繋がった。さらに、本時では、ケニア人留学生を講師として招き、ウガリ作りの調理実習を行った。外国人との交流や実際に調理実習を行う体験を通して、児童は五感を用いながら異文化について学ぶことができたのではないと思う。
15. 自由記述	【授業の様子：導入「海外旅行へ行こう！」】  ※授業で使った、パスポートと航空チケット 

【本時：調理実習「うがりを作ってみよう」】



参考資料・使用教科書：JICA 世界地図